

（論文内容の要旨）

本論文は、芸術を用いた地域づくりに関して、その効果と可能性について事例研究を通じて考究したものである。芸術を用いた地域づくりは、近年、事例数の増加や社会からの注目にも拘わらず、評価が難しいという点から事業継続の根拠となる効果について科学的な検証が行われていない。そこで本論文では、住民を対象とした質的調査と量的な統計分析を組み合わせることにより、芸術を用いた地域づくりの効果とその要因について様々な角度から明らかにすることを目的としている。本論文の章構成およびその概要は以下の通りである。

第 1 章では、本論文で取り扱う課題について整理し、論文の構成について概要を述べている。

第 2 章では、アートプロジェクトが生まれるに至った歴史的、社会的背景について説明し、そこに存在する評価の難しさの問題や文化経済学分野での先行研究の利用について考察している。そして、日本国内のアートプロジェクトの形成背景が海外のアーツフェスティバル事例とは異なることや、規模の小ささやプロジェクトとして継続する事例の少なさといった理由から、十分な検討が行われていないことを論じた。また、芸術分野の先行研究では調査対象者を鑑賞者に限定しており、住民を対象とした調査という視点が新しい試みであることを示している。

第 3 章では、本論文で事例とした「大地の芸術祭 妻有トリエンナーレ」について紹介し、芸術を用いた地域づくり事例としての規模の大きさや継続性に加え、過疎・高齢化問題を抱える農村社会に対するアプローチとしての先進性を評価し、日本国内の芸術を用いた地域づくりの代表事例として分析するに適當であることを説明している。

第 4 章では、心理学や社会学の分野で用いられる質的調査法を利用して、2000 年に開催された第 1 回の芸術祭の作品制作に関わった集落の区長に対するインタビュー結果を分析し、アートプロジェクト参画による達成感や満足感の生成など、共通の項目として認知的ソーシャルキャピタルに関わる項目がそれぞれの集落で形成されているとの仮説を引き出している。

第 5 章では、前章で得られた仮説を 2000 年、2003 年、2006 年に開催された 3 回の芸術祭において作品制作に関わった全集落に拡大した場合の適合性について検討し、さらに地域全体としての芸術祭に対する評価の傾向を把握するために、関係集落住民への悉皆アンケート調査を実施して芸術祭の効果とそれに関わる要因を分析している。その結果、運営の仕方により、「個人的な知り合い」、「地域的な好ましい変化」、「全般的な面白さ・印象変化」が生み出されることを明らかにしている。また、「住民への説明」や「住民個人・地域による協力」が「作品への好感」をもたらし、地域づくりへと結びつくことを示している。

第 6 章では、先に得られた「住民への説明」や「住民による協力」といった作品制作に関わる要因が、その他の変数による影響を調整した場合にも評価に

影響する要因となるかどうかを検討するために、多変量回帰分析を行って他の重要な要因を抽出した。モデルとして適合度が高かった目的変数は、個人の「知り合いの獲得」、「芸術祭を面白いと思う程度」、「地域における好ましい変化」「作品設置をきっかけとした事業全体の印象の変化」であった。これらの評価に関する変数に対して、「個人的な協力」や「作品への好感」、「地域内での信頼」といった共通の説明変数の項目が重要な影響を与えていることを示すとともに、「作品への好感」に加え、「アーティストによる住民勧誘」という芸術祭ならではの特徴的な要因が重要となっている構図を明らかにしている。一方、行政担当者の住民への働きかけ等、行政の役割に関しては、「芸術祭自体の面白さ」に否定的に作用する以外の効果はみられず、アーティストやボランティアを中心とした運営が、個人の生活および地域社会の双方のレベルで肯定的な変化をもたらすインセンティブとなることを示している。

第 7 章では、本論文で得られた成果をとりまとめて結論とし、今後の課題および研究展望について述べている。

（論文審査の結果の要旨）

近年、アートプロジェクトやアーツフェスティバル等の芸術活動が広く展開されてきている。こうした芸術活動は、なんらかの形で当該地域にインパクトをもたらし、地域の活性化に役立っていることが少なくない。しかし、わが国においては事例の少なさや歴史の浅さから、このような芸術活動が地域づくりに果たす役割について科学的に検討した事例は少なく、とくに高齢化が進み持続的な地域発展が危ぶまれているわが国の農村地域における芸術活動の意義については興味ある重要な研究課題として残されてきた。

本論文は、新潟県妻有地域という高齢化が進行するわが国の典型的な中山間農村地域において、2000年、2003年、2006年とこれまで3回にわたって開催されたアートプロジェクト「大地の芸術祭 妻有トリエンナーレ」が、同地域の活性化あるいは地域づくりに対してどのような効果があったかについて、現地での参与観察、インタビュー調査およびアンケート調査を踏まえて実証的かつ科学的に考究したもので、得られた主な研究成果は以下の通りである。

第一に、芸術活動がもたらす地域づくりへの効果を評価する先駆的研究を行い、アートプロジェクト「大地の芸術祭 妻有トリエンナーレ」において作品制作活動が個々の住民生活や地域全体へ様々な形で影響を及ぼしていくメカニズムを明らかにした。

第二に、農村地域における芸術活動の展開によるソーシャルキャピタルの形成という視点から、2000年に開催された「大地の芸術祭 妻有トリエンナーレ」に参画した一部集落の区長に対するインタビュー結果を質的調査法（グラウンデッドセオリー）により分析し、芸術を用いた地域づくりが認知的ソーシャルキャピタルを形成ないし醸成するという仮説を提示した。これは、非物的プロジェクトの成果として生活の質（QOL）や福祉との関連を提示する示唆に富む結果である。

第三に、上記仮説を検証し、芸術祭に対する地域全体の評価を推し量るために、3回にわたって開催された芸術祭において作品制作に関わった全集落の住民に対する悉皆アンケート調査を実施し、統計学的分析により、「住民への説明」と「住民の参加・協力」が、地域づくりの重要な要素である「個人の生活や考え方の変化」や「地域コミュニティの肯定的変化」に繋がることを明らかにした。

第四に、芸術を用いた地域づくりに住民が社会的価値を認めているか、また地域づくりに芸術を用いることの利点はなにかを明確にするために、上記アンケート調査結果に対して多変量回帰分析を行い、前者に関しては個人や地域の協力によってその社会的価値が認識されること、後者に関しては作品やアーティスト、ボランティアが重要な要因であることを明らかにした。

第五に、「大地の芸術祭 妻有トリエンナーレ」という芸術活動が、個人や地域に様々な変化をもたらし、新たな地域文化創造のプロセスとしても位置づけることができ、新しい地域づくりの方法論であることを提示した。

以上のように、本論文は、アートプロジェクトによる地域づくりについて、現地調査を踏まえて実証的かつ科学的に論じたものであり、農村計画学、文化経済学、また地球環境学に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年8月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。